

木曾路はすべて山の中である、あるところは岨つたいを行く崖の道であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入り口である。一筋の街道はその深い森林地帯を貫いていた。

…『夜明け前』島崎藤村

私の故郷木曾地方は、長野と岐阜県の県境に位置し、島崎藤村の故郷でもあり夜明け前の通り、山間の地形です。現在は木曾川沿いに国道 19 号線と JR 中央線が走っており、名古屋駅から特急『しなの』に乗車して約 1 時間で南木曾駅に到着するため、さほど不便さは感じません。

中仙道は家康の命で、京都から日本橋までの山間に作られ、六十九次あり、木曾十一宿はこの街道に沿って二十二里余りの長い溪谷の間に散在した難所の宿場です。中でも木曾福島の間所は溪谷の最も深いところに隠れており、『入り鉄砲に出女』の取締りには絶好の要害の地でした。

かけはし 棧 や命のかぎり 葛 蔓

『更科紀行』…松尾芭蕉

谷あいを葛や蔓のつるを頼みにしたような危険な崖の道を渡らなければならぬことを芭蕉が詠っています。皇女和宮が江戸へ降嫁巡行の頃には、棧は橋になっておりさほど危険ではありませんでした。明治天皇も中仙道で江戸に下向しました。

木曾は木曾 桧 の産地で、尾張藩の直轄領でした。木曾桧は藩の厳しい制度（幹一本首一つ、枝一本で腕一

本切断する）で大切に護られ、ご神木として伊勢神宮はじめ各地の神社仏閣に使用されています。

現在でもご遷宮では木曾桧が切り出されています。かつては切り出した桧を筏に組んで木曾川を下り、中乗りさん（船頭）が尾張まで運びました。

私の子供の頃は、馬籠宿にある藤村記念堂に文学を志す学生が訪れる程度でしたが、昭和 40 年頃、妻後宿を保存あるいは復元して観光客に江戸後期の宿場町の風情をアピールしたところ、驚くほど大勢の観光客が訪れ、今でも観光客が絶えません。

木曾の山間は四季折々の美しさを私たちに授けてくれます。春は雪解けとともに新芽がふき、やがて緑濃く花咲きほころんで山が膨らみ、夏の木曾川に注ぐ支流の清き水は、一分も手を入れておられないほど冷たく、橋の上から小石がよく見えるほどに透き通っています。秋の紅葉の素晴らしき美しさは観た人にしか語ることはできません。冬に向かって山はかれて小さくなり、やがて白銀を頂くようになります。

心につながる故郷

血につながる故郷

言葉につながる故郷

藤村

私の故郷…。

吉村啓治